

よくぞ生きてきた

田中邦子

松が丘二丁目

一九四五（昭和二〇）年になると、B29による空爆はますます激しくなり、三月十日の東京大空襲をはじめ、大都市が毎夜のように空爆で破壊されていきました。軍都広島が空爆を受けないのが不思議な気さえていました。

八月六日午前八時十五分、原爆投下により一瞬のうちに広島は壊滅しました。すべてを失い地獄につき落とされた日。思い出すのもくやしくて、あの忌まわしい出来事は胸の奥にしまっておこうと心に決めていました。でも、被爆者が当時の惨状を語らなければ、この美しい地球を核の脅威から守れないことを知るようになりました。

私は今から七十五年前、一九一九（大正八）年、風光明媚な瀬戸内海の大崎上島^{おおさきかみじま}にて、第一人、妹二人の長女として生を受けました。一九二五（昭和四）年、広島に居を移しました。一九三二（昭和七）年、広島市立高等女学校に入学、よき師、よき友に恵まれ、楽しい学園生活を送り、一九三六（昭和十一）

年三月卒業しました。

その後は家事手伝いをしながら、当時の一般子女の習わしとして、お茶、お華、和裁、洋裁と、女としての稽古事^{けいこごと}に通う日々を送っていました。

その間、満州事変に始まり支那事変と戦禍^{せんか}は拡大の一途をたどり、一九四一（昭和十六）年十二月八日太平洋戦争に突入。戦時色は一段と濃くなっていきました。銃後の国民は「勝った、勝った」と大本営発表に酔っていました。

奉仕活動として、兵器廠^{しよく}、被服廠^{ひふく}にいました。国防婦人会の白いタスキをかけ、母の代わりに、度々宇品港^{うじんみなと}より出征兵士を見送りました。竹槍^{たけやり}の訓練を受け、銃後は婦人の手でと一生懸命でした。

国家総動員法により健康な婦女子が、家でブラブラしていることは許されず、軍需工場で働かなくてはならなくなりました。父が心配して、それなら家から通えるところで働いてみたらと言い、父の紹介で、駅前にある信用組合で経理関係の仕事につ

きました。

八月六日、出ていた警報も解除され、暑い一日がはじまろうとしていました。両親と娘三人は朝食をすませ、妹はすでに出掛け、私もそろそろ組合に出掛ける時分となり、表に出ようとした瞬間でした。(弟は学徒動員で海軍士官として、佐世保にいました。)

両親の顔を見たのは六日の朝食が最後でした。天を裂くものすごい閃光と、地軸を揺るがす大爆音によって、暗闇の世界に閉じ込められました。息苦しく、頭の中は真っ白、目を閉じてじっとしていました。

どれほど時間が経ったのか、ふと目を明けると、倒れた木材の重なりあつた中にポツンと立っていました。振り返ると青空が見えます。「ああ、助かった」、その時の感動は今でもはつきりと覚えています。大木をかき分け、外に出てみました。

何もありません。町並みはそこになく、人一人いません。両親がいた母屋(爆心地より一・三キロ)はペシャンコ。ただ途方にくれ放心状態でした。

そのうちにあちらこちらから火柱が上がり、恐くなり、建物疎開した場所に行こうと、鶴見橋の方向に歩き始めました。途中倒れた家の下敷きとなり、手だけ出して助けを求めている女の子がいましたが、女一人の力ではどうする事もできず、「ごめんなさい」と謝り、通り過ぎましたが、今でも心残りです。水

たまりに映した自分の姿にびっくりしました。髪の毛が、まるで針金のように上に突っ立っていました。

火の勢いは刻々に激しさを加え、強いつむじ風の吹き荒れる中を、全裸、半裸の、どす黒く汚れた血だるまの群衆が、幽霊のような姿で列をなしてやってきました。

皮膚がはげて、たれた手を幽霊のように前にあげ、ぶっ倒れそうになりながら、ぞろぞろ歩いてきます。ひどい熱さのあまり水を求めて川に飛び込む人もいました。子供の頃に見た地獄絵さながらの風景。自分が無傷だったので、どうしてこんな事になったのか不思議でした。橋が焼け落ちるかもしれないから、早く渡って比治山に逃げるように指示され、急いで比治山に登りました。

避難所と書かれた机があり、兵隊さんが二人いましたが、葉は赤チンと油があるだけでした。広場では勤労働員されて、外で働いていた女子商業学校の生徒が、黒いふくれた顔をしてゴロゴロ横になり、虫の息です。たとえ両親が見ても、我が子の見分けはつかないだろうと思いました。

せっかく山まで逃げながら、力つきて死んでいる老人をたくさん見ました。西の空は夕暮れのように暗くなり、雨が降っている様子でした。後日それが「黒い雨」という事を知りました。

六日の夜は郊外の知人の家で一夜を明かし、家族のことが気

がかりなので、七日朝、市内に入りました。町はきれいに焼けていて、宇品港まで見渡すことができました。真夏で薄着だったので、爆風で衣服は吹き飛び、みんな裸で横たわっていました。頼りにしていた兵隊さんもゴロゴロとたくさん死んでいました。

どこを見ても死人、死人、何となく怖かった人の死が平気になりました。家の焼け跡に行きましたが、家族の手がかりとなるものは何一つありません。

誰が配っていたのか思い出せませんが、昼食におにぎりをいただきました。ところが黒豆のような蠅はえが止まり、食べるどころではありません。水だけで飢えをしのいでいたように思います。

七、八日と防空壕で仮眠をとりました。夜になると、昼間集めて高く積みあげた死体に灯油をかけて焼く手があちこちにあがります。

家族も姿を見せないし、食料もないし、こんな状態では自分の体が駄目になると感じ、九日の昼頃、生まれ故郷の島へ帰る決心をしました。島には叔父がいて、寝具、家具、衣類と生活に困らないだけのものは疎開してありました。

家の焼け跡に行き、庭にあった大きな石に「那子元気、島に帰る」と消し炭で書き、被災証明書（誰にもらったか記憶がありません）を一枚手にして帰りました。叔父たちは、広島は全

滅したとのニュースに諦めていたようでしたが、元気だったのかと、涙を流して喜んでくれました。

十一日に九歳年下の妹が焼け跡に行き、私が島に帰った事を知り、元気で帰ってきました。広島女学院専門部の生徒でしたが、礼拝のため講堂に入るところで、先に入った方々は建物の下敷きになり犠牲にされましたが、妹は入る前で、渡り廊下にいたので助かりました。

十五日は両親と六歳年下の妹を探すため、叔父と共に広島に出かけました。呉くれ駅で天皇の終戦を伝える玉音放送を聞きましした。大本営発表を信じていたので、敗戦の報はとてもショックでしたが、「もう敵機の来る心配もないので、ゆっくり捜せる」という安堵感あんどかんと敗戦のショックとで、何とも言えない複雑な気持ちでした。

炎天下、焼野原と化した街を、家の焼け跡に向けて歩きました。叔父と二人くまなく捜しましたが、何も手がかりになるものはありません。人に聞きましたら、病人は日赤病院に収容されているので、行ってみてはとのこと。かすかな望みをもって、照りつける日差しの中をまた歩きました。

日赤につくと、門から入り口までずーとむしろが敷かれ、ゴロゴロと傷ついた人がすき間なく転がされていました。耳や、鼻の穴にはうじ虫がわいていました。病院に一步足を踏み入れると、廊下にも病人、病人。医者もなく、薬もなく、手のほど

こしようもないようでした。

夏のこと、いやな臭いがし、吐き気がしそうです。でも我慢して一人ずつ見て回りましたが、両親も妹もいません。妹は市役所に勤めていたので、何か手がかりはつかめないかと、また二人で歩きました。

その後、妹は牛田町にある友達の家にお世話になっている事がわかり、やっと探し当てて島に連れ帰りました。ガラスの破片が顔や背中に刺さり、痛々しい状態でした。

炎天下を歩き回ったせいか疲れが出て、出血、脱毛、下痢などの症状が出ましたが、村のお医者様が適切な処置を下さし、別に床に着くこともなく、元気になりました。瀬戸内海の新鮮な魚、木からもぎたての果物があり、充分に栄養がとれたので、今日があるのだと思います。

両親の庇護のもと、何不自由のない生活でしたが、被爆を機にして生活は一変しました。みんなで働いて生計をたてました。私は、叔父が組合長をしていた農協へ、次女は洋裁店を営んでいる知人のお手伝いに、三女は警察にと、それぞれ働きにくくようになりました。着物も食料と交換しました。

九月中旬（定かではないが）弟が復員してきました。

両親の消息は全くつかめません。おそらく、両親は圧焼死だったのでしょう。遺骨もありませんでした。父は享年四七歳で

した。よく人様の世話をする優しい人でした。母は享年四五歳でした。十八歳で父と結婚し、十九歳には初めての出産をしました。四人の子育てだけでもたいへんでしたが、父の家には（父の母）、老衰した大姑（父の祖母）もいましたので、お世話が大変でした。

若い頃から苦勞が絶えませんでした。末の妹も十六歳になり、「さあ、これから樂ができる」という時に、被爆して亡くなりました。気の毒でしたかありません。

たしか七月頃だったと思います。二人で旅行をすることのなかった両親が、揃って島に帰り、親戚を回ってきました。（あれは、みんなに別れに来たのに違いないと思っています。）

弟も帰り、子供が四人揃ったのだから、両親の葬式をしてはということになり、叔父夫婦（叔父母の弟、伯母母のいとこ）の肝入りで、しめやかに葬儀を済ませました。六日を命日とし、毎月六日には竹原へ墓参りしました。「親孝行したいときには親はなし」、何一つ親孝行らしい事もしないまま両親と別れたことは非常に残念です。

その後、大学が再開となり、慶応大学在学中だった弟は上京、翌年無事卒業。東京に就職も決まり、下宿近くにいらした方と結婚。次女も知人の紹介して下さった方と、三女は島で仲よくなった方と恋愛結婚。叔父夫婦の協力で、何とか人並みの結婚式を挙げてやり、長女としての責任を果たしました。

今更いまのように、生きていて良かったと思いました。もし私が
いなかったら、親戚のお世話になっていたかもしれないな
と自負しています。妹たちは両親が生きていてくれたら、と
事も多々あったと思いますが、愚痴一つ言わず、私につ
いて来てくれたことを感謝しています。

その後、京都にいた叔父より結婚をすすめられ、三〇歳で結
婚しました。京都、寝屋川ねやがわ、伊丹いたみ、徳島と居を移し、一九六三
(昭和三八)年、夫が本社勤務となり東京に来ました。

地方にいた時は被爆者問題はあまり聞きませんでした。東京
に来て、被爆者手帳のあることを知り、友人に証人になっ
てもらい、入手することができました。

一九六六(昭和四一)年、中野区に住むようになり、中野共
立病院のケースワーカーの紹介で、長広会(中野区被爆者の会)
の仲間になっていただきました。会の方は、皆様良い方ばかりで、
同じ境遇ということで一番心休まります。

小さい病気は数知れず、全身麻酔による手術もしましたが、
現在はまあまあ元気です。

被爆時に一番元気だった末の妹が、一九八三(昭和五八)年
八月八日、広島市民病院で膠原病こうげんびょうのため五五歳の若さで故人と
なり、その年の十一月十三日、弟が慈恵医大で肝硬変のため六
一歳で故人になってしまいました。一年の間に二人の身内を失

い、六歳年下の妹と二人きりになってしまいました。淋さびしい限
りです。

朝は東の空より昇る朝日あさひを拝し、夕は西に沈む夕日を眺め、
晴れた日は屋上より霊峰富士れいほうふじを仰ぎ、静かな生活をしていま
す。心の中から被爆の後遺症の不安を消すことはできません。

これから、若い方々に不安のつきまとう生活をさせたくはあ
りません。地球上から核兵器をなくし、いつまでも青く、美し
い地球であることを念じ、核の恐ろしさを訴え続けたいと思っ
ています。

